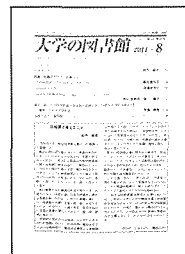


『大学の図書館』（大学図書館問題研究会）が めざすもの

鈴木 正紀

「大学の図書館」
大学図書館問題研究会発行
1970年創刊
月刊
<http://www.daitoken.com>



1. 『大学の図書館』とはどういうものか——

『大学の図書館』（ISSN: 0286-6854）は、大学図書館問題研究会（1970年設立。略称は大図研（だいとけん））。以下、大図研）が月刊で発行している会報（ニューズレター）です。

大図研は、現場の大学図書館員を中心に、全国に約500人の会員を擁する研究団体です（ウェブサイト：<http://www.daitoken.com>）。

『大学の図書館』の起源をさかのぼると、1968年10月に『大学図書館の問題を語る会 会報』として第1号が刊行されています。その後、『大学図書館問題研究会会報』（1970-1982年）を経て、現在のタイトルとなり刊行を続けてきました。今年（2011年）は、第30巻（通号では9月号で454号）を数えるに至っています。

大図研は現場の大学図書館員を中心とした研究団体であると書きました。したがって、会、会員の研究テーマ——これは現実には、年1回開催される全国大会の分科会のテーマ（構成）等に端的に現れますが——は勢い現場の問題、事情に根拠を持つものとなります。近年でいえば、情報リテラシー教育、図書館業務の委託問題、図書館職員の継続教育・研修、図書館システムの高度化への対応、機関リポジトリ、デジタルコンテンツの飛躍的普及、ラーニング・コモンズへの取り組みといったことなどが挙げられるでしょうか。

『大学の図書館』は、年12号発行されます。そのうちの9号は特集を組み（他3号は全国大会に関連した号となっています）、上にあげたようなテーマに関する論考を掲載しています。会員への依頼原稿が中心となりますが、トピックによっては会員以外の方にも寄稿をお願いしています。わかりやすいように2011年の特集を列記してみると

以下のとおりとなります。

- 1月号：「図書館総合展ア・ラ・カルト」（図書館総合展参加者からの現場レポート）
- 2月号：O40とU40—大図研の活動から世代間交流を考える（O: Over, U: Under）
- 3月号：「…のすすめ」（注：Youtube・Ustreamといった新しいサービス、iPad・Kindleといった携帯デバイス、ブログ・ツイッター・Facebookといったソーシャルネットワークサービスの紹介）
- 4月号：（特集なし）
- 5月号：図書館員の外国語事情
- 7月号：震災の復旧・復興支援と図書館サービス
- 8月号：広報のデザインを考える
- 9月号：大学図書館ツイッター担当者オープン会議（第20回大図研オープンカレッジのレポート）
- 11月号：社会人大学院（予定）

6月号は8月に開催される全国大会の総会資料的な内容と大会開催案内となっています。また10月号はその全国大会の速報レポート特集、そして12月号は全国大会の記録号として編集・発行しています。

これまで組んだ特集のなかでユニークなものも思いつくまに列記してみると、「共同リポジトリ！」（2010.2）、「大学図書館サービスへのWebツール活用」（2010.3）、「ライブラリー・グッズ」（2009.5）、「大学図書館と文書館の連携」（2009.8）、「大学図書館員の海外研修見聞録」（2008.11）、「ラーニング・コモンズ」（2008.8）、「電子リソースのマネジメント—ERMSの現在」（2008.3）、「図書館員のセルフケア」（2005.7、図書館員が実践している日々の健康法）などがあげられるでしょうか。

『大学の図書館』は、大図研の実質的な運営を担う常任委員会のもとに設置された編集委員会によって出版活動が行われています。メンバーには常任委員以外に、複数の支部（大図研には全国に

15の地域支部があります)のメンバーに編集委員に加わってもらっています。(現在は4支部)。そのメンバーは、各地・各支部の特徴を生かした特集を組んでいます。

『大学の図書館』誌面はこの特集以外には、「巻頭言」として全国委員・常任委員もちまわりによるエッセイ、時々の図書館関連イベント等のレポート、会員による意見等の投稿記事、また、各支部からの活動報告(「支部だより」)、常任委員会や全国委員会といった会務を進めるうえで開かれている会議の議事録、といったもので構成されています。

また、あえてご紹介しておきたいのは、毎年6月号(全国大会議案書号)に「討議資料」として掲載される、大学図書館界をめぐる1年間の動向のレビューです。これは署名記事ではありませんが、常任委員を中心に、1年間の大学図書館をめぐる動きを領域ごと(近年では、国立情報学研究所・NACSIS-CAT/ILL, 利用者サービス, 電子的サービス, 機関リポジトリ, 組織運営(いわゆる「職員問題」, 委託問題, リカレント教育など)出版流通, 著作権)にその動きをまとめています。近年のものについては、全国大会のウェブサイトで公開をしています(たとえば今年(東京大会)の討議資料は以下のところに公開されています。<https://sites.google.com/site/dtk2011tokyo42/program/shiryo>)

実際に『大学の図書館』にはどういった記事が掲載されているのかについては、以下の方法で調べることができます。

- (1)国立情報学研究所(NII)が提供しているCiNii,あるいは国立国会図書館(NDL)が提供している雑誌記事索引により「掲載誌」を「大学の図書館」をキーワードとして検索します。前者では531件、後者では317件が検索できます(2011年9月30日現在)。ただし、いずれも2ページ以上の記事を採録するという基準があるようなので、1ページ以下の記事は検索されません。そこで別途、以下のようなシステムを用意してあります。
- (2)大図研ウェブサイトには、1995年以降という限定はありますが、すべての記事を検索できる検索システムが用意されています。(上記URLの大図研サイトの左フレーム、「出版・広報の紹介」(「会報 大学の図書館」)「記事検索システム」)ちなみに、大図研では、会が刊行した出版物についての電子的公開についてのポリシーを定めて

います(出典を明記すること、出版から一定の猶予期間を守ること——『大学の図書館』については刊行後すぐに可ということになっています)。

2. 『大学の図書館』がめざすもの

現在、『大学の図書館』の発行部数は、会員約500名分と、それ以外に大学図書館などで機関として購読いただいている分、また会員ではないが個人で購読されている分を合わせると約700部超になります。

冒頭に紹介した「語る会会報」から数えると、刊行を開始してから今年で42年目、大学図書館問題研究会創立からは40年以上が経過しました。私たちの会報は、会報という性格上、主として大学図書館のその時々の問題を考えるために(特集が生まれ、)記事が書かれてきました。それは会員を始め、同時代の仲間たちにそのことを伝え、いっしょにその問題を考えてい、という気持ちに端を発しているのだと思います。まずなによりも『大学の図書館』は、大学図書館とそこに働く図書館員がとらえる「問題」「課題」を掲載し、それを多くの方々と共有するための場として機能していきたいと考えています。そして、同じ大学図書館に働く者として、あるいはそれに関心をもつ者として、会の活動に共感いただき、活動をいっしょに担ってくれる方々との接点作りに寄与できればとも思います。

そして一方、刊行を続けることによって、『大学の図書館』に掲載された記事の一つ一つが歴史的な意味、すなわち、その時々でいかなる問題が大学図書館には存在したのか、それについてその時代の図書館員はどのようにそれを考えたのか、といったことの歴史的証言となっていくことを筆者は期待しています。

これはまだ個人的な考えですが、1969年10月に刊行された「語る会会報」以後のすべての記事の索引を作成し(1-100号までは冊子できていますが、電子化・ネットワークの時代です、当然それを含めてデータベースとして再構築し)、より多くの方々に知ってもらえるような整備を行ってきたいと考えています。

(すずき まさのり・大学図書館問題研究会「大学の図書館」編集委員会/文教大学越谷図書館課長補佐)